

七人

昭和二十三年十月一日 元の米子駅復職

昭和二十四年八月 島根県宍道駅に転勤

昭和五十四年四月一日 五十五歳定年退職

昭和五十四年四月 松江市水道局下請会社に就職

昭和六十年三月 合併のため退職

元宍道町固定資産評価審議委員一期

元宍道町農業委員三期

現宍道町ゲートボール協会副会長

現水利組合井堰管理組合長

シベリア会宍道支部長

神社責任総代 寺院総代

私のソ連抑留記

岡山県 田 中 一 司

昭和二十（一九四五）年八月九日、満州に侵入したソ連軍の命で鞍山製鋼所強制解体作業を終え、鞍山駅

発貨車にて奉天（瀋陽）駅に輸送した。ここで飯盒炊飯したが、逃亡者五百人が出たので輸送が厳しくなり、便所、食物受領以外は絶対下車させなかった。ところが、ハイラルで警察官約一千人を連行したので輸送が緩み、満洲里から入ソした。昭和二十三年六月二十七日まで三年七カ月の間、あのシベリア荒野の酷寒と飢えの中での強制労働を強いられた。この間の抑留生活を逐次記憶をたどりながら、労働、抑留中の出来事、思い出、私が見たソ連の感想等を書いてみる。また戦友たちの手記もあわせ、『平和の礎 シベリア強制抑留者が語り継ぐ労苦』にあらましのことは書いてあるので、特に印象に残ったことや書き漏らしたことについて述べてみる。

終戦

満州鞍山飛行場内戦闘指揮所で終戦の放送を聞いたが、無条件降伏など詳しいことは後日判明した。ソ連軍が満州の東部と西部から侵入してきたのであるが、西部侵入は飛行機観察で詳しく報告された。ソ連軍の服装、兵器などお粗末な兵隊さんが侵入して来たとい

う話にびっくりした。このソ連軍が町の中に入って強奪するが、詳しいことは省略する。

貨車輸送三十五日間

ソ連領内に入ると何だかのんびりした気持ちになった。それでも貨車の上には昼も夜も監視兵がいて、小窓から頭を出すと発砲して命を取ることもあった。

客車のように定時に走らないのでたびたび停車することが多く、車外には食事受領と飲料水受領以外は出られない。実にのんびりした旅である。自由時間が十分あるので、貨車内の戦友と交わることができた。今思い出してみると、よくも三十五日間、貨車の中で過ごしたものだと思される。

アングレンにおける抑留生活

海拔一五〇〇メートルに近い炭鉱町、冬は零下三〇度、夏は四〇度を超える高原特有の気候で、都市建設を目指して、このたび日本人捕虜八千人ほど配置され、四つの収容所に分けて入れられたが、これらの収容所はそれまで囚人用に使われていたもので、飢えた南京虫とシラミ、ノミが充満していた。幕舎その他

の施設は日本製のものであった。

収容所に入って一番先に驚いたことは、まず便所であった。共同便所であった。個人個人の仕切りがないのである。便所は幕舎の中にあつて、大きな穴を深く掘り、縦と横木を交わし、板張りの中央に通路があり、その両側が大便所となっている。左右合わせて五十人ほど、用便中の風景はまことに見事なものである。用便中に横の人と話をしながら、たばこを吸いながら「共產主義って困ったものだ、便所まで共同だ」。飢餓と寒さと重労働の上に私たちが悩ましたのがシラミと南京虫であった。一日じゅう体が無性に痒く、作業の休憩時に焚き火してシャツ、袴下（ズボン下）を交互に脱いでシラミ取りをする。栄養失調の身体の血を吸い取るシラミは、袖の縫い目に列になって白い卵がくっついていて、それをつぶすとプチプチと音を立ててつぶれた。

南京虫は夜の吸血鬼だ。眠りにつくころになると壁のすき間や柱の割れ目から、寝台の木の裂け目から、大小さまざまな南京虫がぞろぞろ出てくる、そして首

筋や手首足首など出ている部分を食う。これまたシラミとは違った痒さがあり、ポリポリとかくとその部分が潰瘍になり、いつまでも治らない。つぶすと一種異様な匂いがたちこめる。その吸血鬼はさんざん私達の安眠を妨げ、朝の起床前になると、ちゃんと元に戻るのである。

一番不愉快に思ったことは、抑留生活二年目になると、日本兵の共産オログの一人が我が作業隊に配当され、労働の勤怠表をつくり本部に送って、作業を怠けるとダモイが遅れるという噂が出たことであった。アングレンでは一年半を過ぎたころより共産教育が始まり、若い者たちをより抜き、タシケントの中央本部で三カ月ぐらい集合教育を受けたり、リーダーの指導で、作業に出ないで若干の報酬をもらって勉強していたようであった。一応我々も皆共産グループに入っており、夜間に労働歌を歌ってソ連に敬意を表してきたものである。

ラーゲルでの入浴

労働が終わってラーゲルに帰ると、まず浴場に行く

(一週間に二、三回)。浴場といっても湯船などはない。四周の壁に取りつけられた数本の水道栓から適量の湯と水が出る(シャワーもある)。しかし、その湯も水も自由に使えない。石けんは洗濯に使うような粗末なものである。ぬらした体に直接両手でこすりつけるが、あまり泡も出ない。洗い流す湯水の量も制限されているから汚れが落ちにくい。入浴を終えるところのまま食堂に行くが、汚れが十分とれず、下まぶたあたりが黒くなっている者もたくさんいた。

食事の主食は黒パンで、麦を中心にコウリヤンなどの穀類を精白しない粉のままパンにしたもので、白パンより固く味は悪いし、一定していない。我々は一人一食分(約三〇〇グラム)、前もって幕舎で分配したパンとスープをすすりながら食べる。スープはジャガイモや豆類と何かの肉を少々入れたもので、みそ汁のようならみみはなく、味も素っ気ない。スープもいくらか臭くても黒パンとともに腹の中に入れないと体が弱って仕事ができないので、鼻をつまんで一気呵成に飲み込んだ。

食事の分配

食事は捕虜の最大関心事である。今、そのころのことを思うと当然なことで、ぞっとする。当時は全く死活問題であったのである。各班ごとに飯上げをする。

各人の食器が多種で、飯盒、缶詰の空き缶大中小、分配は空き缶に柄をつけたひしゃくで分配するが、一人前の分量が見当がつかないので、一通り分配した後、何回も追加し分配することにした。分配するときには全員が、ウの目タカの目で分配者の手元を見たものである。最初は古年兵が分配していたが、慣れてくると全員交代でするようになった。一食の分量は雑炊で飯盒の中盒の半分ぐらいで、そのまま食べてしまうと満腹感がないので、水を入れて水腹で満腹感を満たしたものである。

パンは、各班ごとに一括して分配される。角まぐらの形をしたもので、一つの見本をつくり、それを人数分だけつくり、残りは小さく切り、それを組み合わせ番号を書き、くじ引きして分配した。

ソ連人の人柄

ソ連の兵隊及び一般人は、個人的に日本人に対しては好意的であり、特に軍人は大きな声で怒ることはあったが、私たち捕虜に対して一度も手を出したことがなかった。

これが逆にソ連人が日本の捕虜であつたら恐らく虐待し、労働させたであろうと想像される。一般人も私たちに同情して、食べ物が少なくて腹がすくだろうが、我が国もドイツとの対戦で食料が不足して、我々も十分食べることができなかつたと言つては、時には私たちに黒パンやジャガイモ等を恵んでくれた一般人もいた。ソ連の古老が話していたことは印象に残っているので書いておく。

今、お前たちはソ連の捕虜で、我が国で強制労働に従事しているが、ここで我々ソ連人が日本兵捕虜を虐待したり奴隷扱いをしたりして過酷な労働を強制すれば、数十年後にはその仕返しをされるので、いかに捕虜でも同じ人間であるので差別をしてはいけないと言っていたので、私たちは、ソ連にもこんな人がいる

のかと勇氣づけられた。

私の関係した強制労働の作業内容と特に印象に残っていること

住宅建設

都市づくりのため丘の上に住宅を造る。半地下の住宅はこの地方では適当で、造成が簡単である。

この作業では、①土れんが作り。丘には土れんがを作る赤土が無限にあり、水を一〇〇メートルぐらい運んで来てよく混ぜて、人間の頭ぐらいで適度の硬さにして、標準の大きさの木箱に詰め、木箱を抜いて干し場に運び日干しにする。この土れんがを建築場所に運んで行く。ノルマは一人一日二〇〇個ぐらいである。

②土れんが積み。家造りにはまず半地下で、約四メートル四方、深さ約三メートルの土を取り除き、ここに土れんがを積むのである。この場合のノルマは、家造りの構造によって違うので一律に決められない。③家造り。設計によって土れんがを積み、その上に横木を渡し、木板を張り、その上に、細い木を張る。この上に、コケラといって製材所で造った横一〇センチ、縦

三〇センチ、厚さ約五ミリぐらいの用材を重ね合わせて釘付けにする。玄関を適当に設け、窓二つ造り、座を適当に備え、備品は後に調達するのであろう。

家屋の内部は石灰を塗って部屋を明るくした。昭和五十一年、三十年ぶりにこのアングレンを訪れた池田幸一がこの住宅を見ている。私もできれば一度訪れてみたいと思っている。

運河造り

強く印象に残っているのが運河造りである。河川の下に無煙炭が無尽蔵にあるらしく、河川を移動させるための作業である。昼夜通して三交代の作業である。特に夜間雨降りの中、寒さと暗い中でまことに辛かった。今思い出しても、ぞっとする強制労働であった。

セメント工場建設作業

この作業が我々鞍山ラーゲル日本兵特有のもので、主としてこの作業に従事し、天気の良い日は広い野原の作業にも出かけた。

セメント工場といっても初めからあったのではなく、我々が作業を始める前にドイツから戦後占領して

きたセメント造りの中心となる大回転窯である。この窯を中心に一方から石炭、一方から石灰岩を入れる。石炭は粉末にし、石灰岩は乳状にして、回転しているらせん状の大筒の溝の中を流す。点火した石炭の火によって焼かれると、石灰岩が小さい粒になって傾斜している筒のらせん状の溝の中を流れ落ちる。これがセメントであるが、すぐにセメントではない。約一カ月屋内に置き、次の工程に移る。この粒状のセメントの原料を粉碎機にかける。四回ぐらいで本当のセメント状の粉末ができ上がる。

この粉末にギブス、粘土、その他のあるものを混入してやっとセメントができ上がるのである。このようにセメントができるまで簡単なように見えるが、石灰を点火するまでの工程、石灰岩を乳状にしてらせん状の溝に流すまでの工程。今でも思い浮かべることができきる。

電気熔接、ガス切断、鋸打ち、点検、点検試運転、成功の喜び。部品作りの協力、ボルト、ナット、旋盤、鍛冶屋、給水塔、石炭下ろし(貨車)。ノルマと

いっても作業内容が複雑で、機械関係のものではできなかった。ソ連側の作業監督も厳しきはあったが研究的態度で、日本兵も捕虜という気持ちを持って技術員という立場で、毎日意欲を持って工場造り、機具作りに励んだのである。

セメント作りをする一方、工場造りにも力を入れなければならなかった。

「平和の礎」抑留者の手記を一応読んだが、工場造り、製品作りのような記事は珍しい。とにかく意欲を持って作業することができた。

精練所内での様々な労役、建築現場での穴掘りや資材運搬その他の雑役、石炭や木材の倉庫からの荷降ろしの作業等、また冬はこれらの作業のほか、コチョコチに凍結した糞尿処分の作業等、とにかく捕虜ならではの過酷な肉体労働ばかりであった。

これも日本の敗戦の結果であり、やむを得ないのかと思いつながら、奴隷同様の日々の生活には強い憤りを覚えると同時に、身の不運さをつくづくと嘆いたのであった。

収容所の生活も二年目ぐらいから充実した生活ができるようになった。一日の重労働が終わって休憩しなければならぬのに余計な文化活動ができるものかと、初めはそう思っていたが、三交代の者が順序よく活動したので何とかできるようになった。壁新聞も工夫して、記事も文字の大きさも読みやすいように考え、大きい紙を大・小、角・丸と形を変えて切り、この紙に記事を書くようにしたら面白い壁新聞ができた。さらに文字の大小と色彩も変えると変化ができて、皆さんに喜んで読んでもらうことができた。音楽でも楽器を作ったり、演劇でも創作劇を作ったり、舞踊でも名取の資格を持っている者について同志が練習して見事な舞踊の夜が楽しめた。浪曲、講談も得意な者が自慢の声で「佐渡情話」「森の石松」等、おなじみのものを披露して聴衆を喜ばすようになった。それも定期的に行うよう計画して、ラーゲルで労働の疲れをいやすことに係の者は大変骨を折って皆に喜ばれた。

収容所は、朝に夕べに革命歌が響いていた。民主グ

ループによるもので、タシケントの政治教育を受けた若い民主主義者で、毎晩のように室内でも室外でも集会があり、共産主義、マルクス・レーニン主義、資本主義等について十分間程度の講義を受けて、休日には演劇団による公演を行なった。

民主委員会の組織については、委員長を頭に宣伝部、文化部、青年部などに分かれ、青年行動隊もあった。民主化教育にはソ連側の指導もあり、「日本新聞」などがハバロフスクで刊行され、収容所にも配布され、日常の宣伝活動に使われた。

ソ連側の狡猾な二面性について

管理責任者である収容所長は、軍国主義を否定しながらも、その組織を作業向上をはかるために将校団を煽りたて、一方では旧軍隊組織を壊して兵士の中から積極分子を抜てき、教育して共産主義化を進めるという二本立てで巧みに陽動作戦をとったが、結局は早晩、後者の方向に進むであろうということは、先進のタシケントの収容所が立証していることだと言う。この手に乗せられている将校たちと、日本人かソ連人か

分からぬ民主主義者の無節操を嘆くのであるが、私たちは一刻も早く帰還させてもらうために、二面性のどちらにも偏らないで、本気で毎日の作業に熱中したのである。

昭和二十一年十一月、初めて抑留者各自の家庭に「俘虜」という特別葉書が支給された。書く内容は、ただ元気でいるとしか書けない。むろん今いる場所は書いてはいけない。内容を点検され、発送された。復員後、我が生家に帰りこの葉書が届いていることを確認し、ソ連側の思いやりと懐かしさを覚えた。

社会主義国の労働者

ソ連の企業はすべて国营で、コルホーズ、ソフォーズ等は農場で、バザールは小売店、新聞社の代表的なもの、イズベスチャ、ブラウダ、放送局はモスクワ放送、ハバロフスク放送等主要都市にある。すべての労働者が国家公務員（解雇の拡大）。

ソ連人と一緒に働いたコルホーズでのジャガイモ掘り作業。私たちがあまりよく働くと、「ヤボンスキー・オデハイ・マール・ラボータナーダ（日本人、

少し休憩しながら仕事をせよ）」と言った。

衣食住

一般的にソ連人の服装は作業服程度のもので、冬季になると綿入りの上下服を着てその上にシューバ（綿羊の皮で作ったオーバー）を着、足には靴下の代わりに綿の布を巻き、靴はカートンキ（フェルトで作った長靴）をはき、婦人は寒中でもスカートをはいている者が多いようであった。頭には男は防寒帽をかぶり、婦人はネッカチーフをかぶっていた。

ソ連人の食事は、朝食が穀物に魚または肉とジャガイモ等でつくったスープに黒パンか白パンの食事、昼食は野菜スープにお粥程度のめしとパン類の食事、外で食べる労働者の食事は、黒パンに塩鮭の生に水を飲んだの食事をしているようであった。夕食は朝食と同様であった。

ソ連人は日本人と違い、夜は寝るだけであるので、軽食をとり、胃の負担を軽くするのだと言っていた。

ソ連の一般家庭の家は、平屋の一戸建ての丸太造りである。丸太の二面を削り、これを井桁に組んで積み

重ねて造り、窓は三方にはめこみ式のガラス窓を付け、居間は六畳程度の部屋が二間と台所兼食堂が一間と玄関であった。台所と居間はペーチカで仕切っており、台所のカマドの燃料は薪または石炭を燃やし、カマドの煙出しはペーチカに取り付けて熱を有効に利用していた。建物はすべて経済的に設計され、付属建物は倉庫と便所である。便所はソ連の一つ穴といって、丸い穴が一つある便所で、大便も小便もこの一つ穴で用を足していた。

軍人

私が見た地方での軍人の上官と兵隊関係であるが、日本の軍隊のように見たたびに敬礼するでもなく、その上官に用件があるときに敬礼しているようであった。また上官の命令も絶対服従でなく、意見が違うと互いに言い合いをしているようであった。

シベリア鉄道

シベリア鉄道は、モスクワを起点として沿海州のウラジオストックまでの間、延長一万六千キロのソ連第一の鉄道である。当時ウラジオストックからモスクワ

まで旅客列車で二週間、貨物列車になると一カ月以上の日数を要するようであった。いかにソ連が大国であるかがうかがわれる。

旅客列車は一日一往復であり、最初の列車が出発してからモスクワに到着するまでに後続の列車が十三本出発し、往復では二十八本の列車が必要となる計算になる。

抑留者でモスクワに抑留された人たちは、満州から四十日間の日数を要したと話していた。その頃は単線で蒸気機関車であったが、現在は複線で電化されていて、短期間でモスクワ―ウラジオストックの間を結んでいるようである。

抑留生活により得たものは何か？

満州で編成された九七飛行大隊一千人は部隊も出身県も違い、軍隊の階級も二等兵から大尉まで、軍人以外では警察官、軍属等で、職業も公務員、芸能人、職人、教員等すべての職業の人たちの寄り集まりで、共通しているのは日本人であることであった。

入ソ当初は軍隊式であったが、私たちはソ連の捕虜

であり、ソ連人の命令によって行動及び労働をしているので、次第に軍隊式もなくなり民主化され、○○さん、○○君と呼ぶようになる社会生活の状態となった。しかし、捕虜となると目的もなく異国の地で異国のための労働で、衣食住も最低で、人の食物でも盗んで食べる状況であった。しかもその盗んだ者は、以前は地位のある者であったことには驚いた。

人間、地位も階級も金もなく、すべてが平等で、しかも常に空腹感があると、第一に食べることが先決である。凍った馬の糞がジャガイモに見えたり、赤レンガのかげらが黒パンに見えたり、中には野草を食べて中毒を起こして死んだ者がいるほど、いつも頭の中は食べることが先決であった。私なりに欲望の順位をつけると、無欲、食欲、帰還欲、私欲、その他の順であるように思う。人間このような環境、境遇に遭遇すると無欲となり、我を忘れて気力を失い、地位や階級の衣を脱ぎ捨てて丸裸の人間となる。私は、人間は食欲、私欲が満たされて初めて地位、階級が授かるのであるということ、あの酷寒の地シベリアの抑留生活

の中でしみじみ感じ、体験したのである。

帰還

私にとっていよいよ帰還の時が来た。

ソ連将校と民主本部の幹部がダモイの名簿を読み上げる。ロシア語のアルファベット順に、ゆっくり二度繰り返しながら名前を読む。

その中に私の名を二度はっきり聞いた。その時の感激、感謝、今でもはっきり覚えている。この帰還者は作業成績が良かった者や民主運動を熱心にやった者だろうということが分かった。アングレンで第二次の帰還者の中にあり、「お先に帰らせてもらってすみません」と名残り惜しくアングレン駅に歩き、貨物列車に長時間揺られ、ゆっくりした気持ちでシベリア広野、バイカル湖をながめナホトカに輸送された。海岸の天幕生活、民主グループの目は帰還者に鋭く、一挙一動に注意した。民主教育ができていないと彼等のしごきは執拗で、反動的な者は奥地に逆戻りされる者もあつたようである。仲間とよく話し合い迎合を装い、民主グループの話に聞き入り、労働歌や赤旗の歌をよく歌

わされた。

いよいよ乗船するためのソ連側の最後の人員点呼、乗船者名簿がソ連将校の聞き取りにくい日本語で読み上げられ、順次「信濃丸」と船腹に書いてある日本船のタラップに上った。

いよいよ待ちに待った乗船である。シベリアの最後の土からタラップを踏みしめた時の感激は今も忘れられない。ソ連から解放され日本に帰国できたのである。私たちを迎えに来た日本女性が、「皆様方、長い間ご苦労さまでした」とあいさつし、迎えてくれたあの一言で、三年半の異国の地での苦労も忘れた。甲板に上がった者が飛び上がって叫ぶ声、緊張も統制もない。船から離れていくナホトカを見て、ソ連での三年半の終幕を見定めた。戦友の皆さん、ソ連の手は延びてきません。もうすぐ祖国日本に帰って行くのです。我々は長い間耐え難きを耐え、今ここに自由と希望を取り戻すことができたのです。

亡き戦友に代わって、非国民、民主屋を「民主グループの指導者は前に出ろ」と糾弾する。こうしたト

ラブルが起き、シベリアでお前たちが我々にとってきた態度に対して謝れとの内容で詰め寄って船内は騒然となった。

「私たちがシベリアで民主運動をしたのは、ソ連のためでなく、反動分子を批判する目的でもなく、ただ早く日本に帰るためのカムフラージュであったのである」と言ったら、ただ黙って聞くだけであった。船長の仲介により騒動も治まった。

日本上陸

昭和二十三年六月二十七日朝、二千人を乗せた信濃丸は舞鶴港に近づいた。「陸が見える、おお日本だ、舞鶴だ」。喜びに満ちた目、この時の感激は今も忘れられない。紺碧の海に浮かぶ島影や新緑の山並み。七年半ぶりに見る山並みが刻一刻と鮮明になり、岸壁の岩肌がはっきり見えてきた。

屋根が、白壁がはっきり見える。荒涼たる大陸で、満州の軍隊時代から言う七年半ぶりに見る目の平穏な日本の美しい眺めは、正に夢の楽園のように見え感無量であった。

我も我もと甲板に上り、祖国に帰ったのだ、万歳、万歳と喜んだ。投錨とともに波止場に着き、患者が先に運ばれ、いよいよ上陸したのである。舞鶴に着いたのである。

引揚者名簿によって人員点呼があり、それが終わると、浴場横の大広間で全員裸にされ、荷物、衣類等をその場に置き二列縦隊に並び前に進む。途中で上からと横から白い粉が噴き出しているところを通過すると、頭から体じゅうが真っ白くなり、これはシラミ退治のDDTであったのである。

次は入浴であるが、大浴場で一遍に百人近く入浴できる浴場であった。五年ぶりに入る正式の風呂で石けんをつけてタオルで磨くと、何分にも五年ぶりのあかが、こすればこするほど出る。誰かが、一遍にあかを落とすと皮膚が弱くなって風邪をひくと言ったが、途中で洗うことをやめると、あかの残った部分がかゆくて大変であった。それでも一時間近くいた。あかが落ちて体が軽くなったような気がした。

入浴から上がって下着類及び軍服は旧軍隊のもので

あった。シベリアから着て帰った下着類は全部廃棄されたが、綿入れの上下の衣服は新品であった。荷物の中身は全部点検され、共産思想の冊子等は全部没収されていた。

帰国第一夜

食堂で夕食。食事の内容は、赤飯にお頭つきの魚に四品程度の副食であった。

食事の前に身体検査、血液検査があり、食事が終わると、元気な者は援護局内を見学した。

復員手続き

二日目の六月二十八日。ソ連抑留者の疾病、怪我等による後遺症等の有無の事実の申告書を提出。

復員証明書、食糧品等の配給切符の交付があり、帰国一時手当として八〇〇円の支給があったが、当時の日本の金の価値がどのくらいであるかが不明であったので、出征時の給料に比較すると相当の大金であるように思った。

六月二十九日は、郷里に帰るため、各人に国鉄の無料乗車証明書が交付され、昼食用の弁当も支給され、

友に「元気で暮らせよ」「また再会を」と固い握手を互いに交わし、帰郷先ごとにバスに分乗して東舞鶴駅に向かつて出発した。

シベリア抑留記(二)

岡山県 片山 衛 真

六、十一中隊

十一中隊は土木建設の作業中隊だった。病室を出た私は次の日から作業に行く。十月中旬、毎日零下三十度、八度の寒さでの屋外作業は労働より寒さとの戦いでもある。レンガ造りの工場建設中だった。連日レンガを積む作業が行われていた。鉄板を焼きその上でセメントを練るのである。温めて作られたモルタルはレンガ積みで使用されると同時に凍ってしまう。レンガは凍って積まれて行く。支柱の中にはセメントを入れることになっていたが、雪と水を入れて凍らせた。暖かくなれば日本兵は日本に帰る。日本に帰れば建物が

倒れようと我々の知るところではない。ソ連責任者に知られないように手抜き工事で作業は進められた。

ソ連責任者は技術大尉だった。四中隊の工場長は鬼のように兵を酷使してきたけれど、十一中隊の作業責任者は我々に命令的に作業を強要しなかった。中隊長も兵に対して決して無理を言わなかった。そのためにも作業で苦しむようなことはない。また零下四十度を越す寒さになると屋外作業は休み、体力を温存することができた。作業ノルマは二〇パーセント、収容所で必要な費用も得ることができず、他の中隊に助けてもらう生活だ。給食も最下位の丁食である。四中隊は、ノルマは一〇〇パーセント達成され甲食を食べることはできるが、労働に酷使され死亡者は多かった。十一中隊は丁食で水の多い粥であるが、体を休めることで死亡者は少ない。作業工程も不明朗であり、六十人の隊員は寒さに耐える一日を過ごす始末でした。掘方は一立米掘れば一〇〇パーセントと定められている。けれどシベリアの寒さは格別だ。土が凍りツルハシを受け付けない。土を掘るには、掘る場所の上で木切れを集